

日本の水意識は、  
古くまで遡ると東アジア一帯にルーツを持っていたようです。  
経済成長や水道敷設などによって、日本の水環境は激変しました。  
その急激な変化によって生じた歪みは、  
今、見直しが迫られています。  
地元の人々の生きる知恵から論理を立てよう  
という生活環境主義が、  
新たな共生の論理の獲得に役立つかもしれません。

生活環境主義から見た共生の行方

# アジアと日本の水文化



## 鳥越 皓之

とりごえ ひろゆき

文学博士 早稲田大学人間科学学術院教授

1969年東京教育大学文学部史学科（民俗学）卒業、1975年東京教育大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程単位取得満期退学。関西学院大学社会学部教授、筑波大学大学院人文社会科学学術院教授を経て、2005年4月から現職。

専門は社会学、民俗学、環境問題、地域計画。主な著書に『水と人の環境史—増補版』（編著 御茶の水書房 1991）、『柳田民俗学のフィロソフィー』（東京大学出版会 2002）、『花をたずねて吉野山』（集英社新書 2003）、『環境社会学』（東大出版会 2004）ほか



白山山地の山の神 鳥越皓之撮影

コントロールできない水と共生する

人というものは水に明らかに依存してきたのです。双方に支え合ったという側面は弱い。

共生という、生物学でシンバヨオシス (Symbiosis) とどう言いかたがある、寄生・パラシテイズム (Parasitism) の反対語として使われています。依存も共生に入っていますが、現在普通に日本語で使われている意味の共生は、どちらかという共存共栄といった考え方です。

水と共生するということ、水は自然の代表的な物質の一

つなので、確かに人は水と共生してきたともいえるけれど、本質的に見ると依存してきたのです。

歴史的に遡れば遡るほど、共生というよりも、水をなだめすかしてなんとか人と水との良い関係を持つとうとしました。

水はじゃじゃ馬みたいなところがある、すぐにいじわるをする、いじけるところがあつてなかなか思うようにできない。それをコントロールしようというのは儂い夢ではあるけど、しかし常に努力してきたんです。

今は、「コントロールできる」という思想で努力しています。今の政府の河川政策は、明らかにコントロールしているという考えで進んでいて、もしもできなかったら自分たちの技術が劣っているからだという考え方を持っています。私はそれを誤っていると思いますが、そういう考えが成り立つことは理解できません。

昔の人は、水とコミュニケーションをとる必要があつたから、お互いに理解しあおうと考えた。そのため水をシンボライズしなければならぬ。日本の言葉で「水の神」と呼ぶのは、ひとつのシンボライズした形です。

水の神の話では、よく異類婚姻譚が登場しますが、古いところではいと怖い水の神がいて、人間は

その水の神となんとか近い関係を  
持ちたいと常に願っていました。

拝むというのは相手に対する敬  
意ですから、最初は拝んでご好意  
に甘えるという考えを持ちました  
が、少し怖さが薄れてきた段階で  
人と神様の距離が近くなつてくる  
そのため、人は神様と結婚をしよ  
うという、今の私たちでは、なか  
なか考えつかない思いついた考え  
を持ったわけです。

水の神と結婚すれば水の神と近  
しい関係になれる。水の神は水早  
を自由にするわけで、豊富な水と  
足りない水を両方自由に操ること  
ができるものが水の神であり、水  
の本質で、そのおこぼれに自分た  
ちが与りたいということです。

異類婚姻譚では、たいがい子供  
を生むときに見るなと言われたの  
に見てしまうことよつてばれて  
しまう。このばれてしまう、とい  
うのはなかなかいいシチュエーシ  
ョンですよ。ばれないと帰れな  
いから、ばれることでその本来の  
姿が表れるのです。

話として水の神は蛇になること  
が多く、古事記、日本書紀にある  
ので神話といつてもいいのでもし  
れません。神話から始まつて昔話  
伝説化していきました。

神話から昔話に至るまで一貫し  
ているのは、どうしたら水の神に  
近づくことができるかということ



「花祭り」での「山の神」愛知県豊根村 鳥越皓之撮影

を突き詰めた結果、そのための思  
いがこういう口承文芸として残つ  
たと考えたらいと思ひます。

したがつて婚姻もなだめすかし  
の二つの手段で、つまり絶対に人  
間が制御できないし、なだめすか  
して良い関係を持つしかできない  
のだから、婚姻して親戚になると  
いうのがいい、ということだった  
わけです。

ブナ林の自然保護で有名な地域  
で世界遺産になつてゐる白神の近  
くに、赤石川という川が流れてい  
ます。この赤石川は金鮎がとれる  
ので有名な所で、1971年(昭和  
46)に洪水があり、多くの村人が  
亡くなつたことがあります。

生き残つた人々は、山の神様が  
怒つたから洪水が起つたと思ひ  
ました。省みれば、川の掃除や川の手  
入れをこころしばらく怠つていた。

それに怒つて山の神様自身が掃除  
をしたんだ。掃除のついでに人も  
掃除されたんだ。

自分たちの怠慢であつたと解釈  
した。これを地元の素朴な人たち  
の考え方だといつてしまつては駄  
目だと思ひ。こういう解釈をする  
ことが一つの文化であつて、確か  
にこの解釈は今後の環境保全に役  
に立ちます。省みれば、日本人は、  
この解釈をずっと続けることで川  
を保全してきたともいえるわけ  
です。

手入れをしないといわれると  
人間はしないものだけど、このよ  
うなシンボルの怒りという解釈を  
することよつて、結果的に環境  
をうまく保全することができた。

これは素朴な人の考えというの  
ではなく、それは現場の人が、そ  
こで生きるための知恵と解釈し直  
せば、現代に生きる我々にとつて  
も、学ぶべきものがあると思ひま  
す。

いずれにしろ、水は怖いもの、  
水害というものを明確に持つてい  
るわけだから、それを内包した論  
理を地元としては持つていなか  
らばならなかつた。

自分の身近な人が亡くなつたと  
きに納得できない死に方つてつら  
いじゃないですか。こういう解釈  
によつて自己納得はできるわけ  
ですよ。どうしていつたらいいかと

いう政策も出てくるわけですよ。  
これが今私たちが考える、水との  
共生の一つのことかなと思ひます。

## 水の神を脅す

異類婚姻譚に象徴されるように、  
常に意識して神と結びつくように  
したんですが、現実の事象を見る  
と、拝んだり頼んだりしてるだけ  
でなくて人間が神様を脅している  
のがわかります。

これが日本の立派なところ。世  
界的な大きな神、GODにあたる  
神を脅す話は聞いたことがありま  
せん。ところが日本では、神様が  
言うことを聞かないと脅すんです  
よ。

水の神は山のほうに住んでいて、  
山から水が流れるところがシンボ  
ライズされていて、滝つぼのそこ  
ろに水の神が祀られたりすること  
が多い。全然雨が降らないと滝つ  
ぼに石を投げたり、いろいろ脅す  
んですよ。いつも頭を下げていて  
だけじゃなくて、必死ですから最  
後はそういうことがある。

茨城を歩いていたら、「これが  
いざというときに滝つぼに投げ  
る石です」と見せられました。その  
石がおばあさんの笑つてゐる顔な  
んですよ。これがわからない。すご  
く良い顔なんです。ものすごく魅  
力的なおばあさんの顔で、それを

村人がワーつて運んでいつて、エ  
イツて投げる。イメージという  
笑いながらおばあさんが沈んでい  
くんですよ。これすごいなつて。

日本の神様には英語訳がない。  
GODじゃないし、スピリットつ  
て訳せるけど精霊というのともち  
よつと違う。我々神社に行つても、  
真面目に拝んでないじゃないです  
か。お正月とりあえず神社に行く  
けど真面目じゃないですよ。10  
0円かなんか投げ込んで、願ひ事  
をいつぱいする。たつた100円  
で願ひが叶うことなんてあり得な  
い、とは思ひえない。

かといつて昔は真面目で、今は  
信仰が薄れてこつなつたかとい  
うと、全然そんなことはない。弥次  
さん喜多さんとか見てもわかりま  
すよ。

一応手を合わせてはいるけれど、  
私たちと神様とのつきあひはその  
程度なんです。うちの村が今年も  
豊穣になりますように、みなさん  
が健康でありますように、と手を  
合わせるけど、気持ちがその程度  
だから神様は近い、親密な関係と  
いうのがあるんですよ。とはい  
え、自然のコントロール権は神様  
にありますから難しいんですけど  
ね。

神様を脅すのも、必死の延長上  
にあるんじゃないですかね。農作  
物がアウトになりますから。ここ

まで頼んで駄目だったら、脅すしかないという立場でしょうね。

日本の農産物は、おそらく里芋、水芋が元々だと思っただけですが、水田を取り入れましたから。粟稗の時代もありましたが、特に年貢の関係で米になった。米を絶対つくらなければならぬ。ところが日本は乾季雨季というものが無い。梅雨は、雨季とはいえないものだから、水は絶対不足します。

だから日本は水の豊かな国なんです。水田稲作という雨季のある地域の作物を雨季のない日本に持ってきたことが悲劇なわけですから、水の神様を脅すなんていうことをせざるを得なくなる。

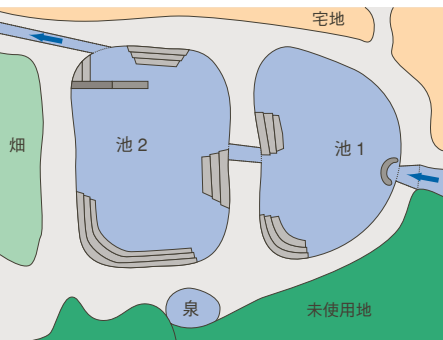
米の導入をすることによって、日本全国同じものをつくるようになった。軍事上、首都は盆地地域につくられますね。奈良なんかは水が足りないところなのに都になって、東大寺をはじめとして社寺が水田開発をしていきますから、ものすごい悲劇です。吉野山が水源ですから、桜を植えたりとかして、山の手入れを必死にしていこうと考えると、脅しも共生というところがあるかもしれませんね。

## 東アジアの水

では、日本の水利の基本システムがどこからきたのか探るため



上：沖縄旧玉城村の「なかんばかり樋川（ヒージャー）」写真2枚とも鳥越皓之撮影  
右：中国雲南省麗江古城。手前が洗濯物、真ん中が食材などを洗う所、奥が飲料水。  
下：浙江省の村の池の配置図。



に、アジアの例を見ていきましょう。

東南アジアは少し違うので、東アジアに限りません。東アジアは中国と韓国と日本とモンゴルになります。モンゴルは農業が主な国ではないので、中国、韓国、日本で見えていきます。

この3カ国はすごく似ているんです。湧き水、川、井戸、それからそこにおける信仰というのはすごく似通っている。

まず、湧き水のあるところに都市や村ができる。これはかなり世界的に言えることですが、ただ東アジアは水の神様がいて、水の使い方、湧き水を明確に3つの領域に分けることができます。

一番奥にある溜め池は、飲料用水になります。写真が小さくてわかりにくいかもしれませんが龍が彫ってあります。二番目は野菜を洗ったり米を砥いだり、料理用になります。三番目が洗濯用で汚れたものを洗う場所です。この3つに必ず分けているんです。

配置図だけを見ましたが、中国の浙江省で私たちが見た村にはものすごく大きい池が村の真ん中にあります。日本では村の中心に泉・池があることはないのです。とても驚きました。この村では、山からの表流水が池1に入り、ついで池2、そして村の中の溝へと

流れていきます。伏流水としてあふれたのが地図の下の泉から出てくるわけですね。この泉には明確な水の神というのがないんですが、しつこく聞くと「龍」とかそういうものがぼんやり出てきました。いくつか村々、都会をまわっているうちに姿が出てきました。山と村の間に先祖のお墓があって、中国ではかなり明瞭に、山には先祖のような存在があって、基本的にはそれが水を守ってくれている。あるいは水をつくってくれている。その下側に自分たちがいて、ルールに乗って水を使って生きていく。

山には、川に並行した空堀がある所があります。そうすると洪水を防いで、それでもだめなら一般の川、自分たちが使う川に入るようになっていきます。川に入ると汚れるから望ましくはないけど、少なくとも自分たちの宅地はやられない。そういう工夫をしてある所もありました。いつも大洪水がくるわけではないから、だいたい空堀は空の状態です。

また、日本も中国も韓国も共通している行事があって、正月の元旦には男の人が最初に水を汲みにいきます。沖縄では若い男の子になっていきます。日本では「若水」といい、中国では「頭水」といい

ます。

こういうことを、昔の民俗学では「古層」と呼んでいました。つまり現代も生きて行なわれている習慣のことです。

こんなに広く東アジアに共通しているということは、とても古い文化だからという仮説があるわけです。男の人が水を汲みにくるといふのは、いずれもその水には力があると思われている、その行事があることは共通していることだから、ひとつの古層と考えていかと思います。正月に新しい水を汲むということは、新しい生命をもらうということであって、さつきの中国の村でも死にそうになるとそこから水を汲んで飲ませるそうです。本当に死んでしまうと、そのこの水で体を洗っています。これは日本でも聞くことです。

ここが共生といえるかもしれませんが、水というのには力を持ち、力を与えてくれるという信仰があり、水との大変強い関係を保っています。

しかし、沖縄は死者とのかかわりでの水というのがどうもうまく出ないし、山とのかかわりもあまりきれいに出来ないんです。ただ写真(28ページ)にもある樋川ヒシガハといわれているところ自体は山に近い形なんです、その向こうにグスクといつて山があったとして、ここ

との関連の儀式を聞いてみたけど結びつかないんですね。結びつくらすごくうれしいんですが。

日本本島では、山の神と水の神が結びついていきます。沖縄で見えないのは、私たちの調査量が少ないのか、違う論理があるのか、今のところはわかっていません。

### 便利よりも

### 楽しいという価値観に

泉がある所にはだいたい大木があります。それで都会のほうに行ってみると、やはり泉の所に大木をよく見かけます。これは山のシンボルですね。だから山と水というのは一応結びついていきます。この木は「龍木」と呼ばれています。ところが、中国政府が水道化を進めるために「泉はやめなさい」といつている。水道ができて使われないから泉が埋められるんです。

沖縄も同様で、樋川を公園化しています。私はそれはよくないと思います。「沖縄タイムス」の文化欄に書かせてもらったんですが、公園なんてやめてほしいですね。公園というのは公共事業で整備するだけで、使わない水になる。

公園では水はとりあえず流れるかたちになっているんですが、地元の人が管理しなくなるから水がダメになっていくんです。地元の人

は飲料水にする必要がなくなる、自分たちの厳しいルールをなくしていくんです。水道化によって、水の利用のルールが崩れていつていきます。

沖縄の樋川は、農業労働したあと体を洗ったり、野菜類を洗ったり、馬に水を飲ませたり、下のほうで衣服を洗ったりして、すごいコミュニケーションの場だったわけです。みんなが夕方集まってくるからすごく楽しい場だった。

水道が設置されたあと、コミュニケーションがなくなると、その村は今、まったくダメになっているんです。コミュニケーションがなくなると、老人は家にもつてただけだし、水が家を出るからわざわざ出かけるなくなった。奥さんも働きから帰ってきたら台所で全部できるわけだから、外に出なくなりました。

村として家は地理的に固まっているけれど、相互のコミュニケーションがなくなっている、話を聞いたら寂しいというんですね。だけど使わない所に行つて座っているわけにもいけません。

水というのは、こういう意味のすごいプラス面を持っていた。村なり町の中心に水というのがあって老若男女が集まるコミュニケーションの場だったのに、水道化というのがそれを失わせてしまった。

水を運ぶ必要がなくなったということは、便利ですがね。

玉城村たまぎらのときは樋川をなんとかしようと考えていましたが、平成の大合併になって玉城村の議会も村長もいなくなつて支所になった。そうすると遠くの本庁の人が考えるから、場への愛着が弱くなった。ではないかと私は思っています。コンサルタントに頼んで公園にしましょう、という発想になる。

新しい時代の流れとして何を使利にして、何をそのままにしておくかという考え方は、もうじき始まるんじゃないかという気がするんです。便利ばかりではしょうがない。不便なものも便利なのも両方あって、これは不便なままに留めておきましょう、というのがある段階で出てくるんじゃないでしょうか。今のところ便利、便利となつている、これが一番の問題ですよ。

便利よりもせめて楽しいというほうに切り替えてくれたらいいのになあ。楽しいものの中には、不便なものが必ず入るわけですから。

菅豊さんが紹介した鮭漁の話(『水の文化』15号)も、鮭を一網打尽に捕つても面白くないからや昔の技法で捕る、そうすると楽しいわけですよ。楽しいということに軸を置いていた。生態系保護一辺倒ではないはずですよ。

### 生活環境主義から見た水

私たちが主張している「生活環境主義」は、社会学辞典とか外国の辞書にも入るくらいになつてきて、ずいぶん流行り始めてきています。

生活環境主義誕生の端緒は、私たちが行なつた琵琶湖の調査にあります。総合開発に対してどういう政策があるか、という環境保全を第一に考えていた中で、環境保護運動としてエコロジー論が前面に出てきたんです。ただ、それは現場とあまりにもかけ離れた都会の論理でありすぎた。

つまり琵琶湖周辺には1500万人も住んでいるのに、人が住まないことを前提とするような、人間をかく乱要因とするような考え方になつてしまった。そのモデルは琵琶湖ではストレートに使えない論理で有用性が乏しい。考え方は自身はすごくいいんですけど、その現場で使えない論理でありすぎたのです。

もう一つは、近代技術を使つたら解決できるんだという論理。これも技術には魅力があつて解決できる側面もあるんですけど。

この2つの論理が対立していたんです。当然、行政は近代技術の方に熱を上げていた。

都賀川だけではなく、神戸を流れる川の多くは水源の六甲山脈南斜面から、ほぼ一直線に瀬戸内海に流れ込む。



しかし現場は、その2つとはちよつと違う論理を持っていた。その論理に焦点をあてたのが、生活環境主義です。

つまり、地元の人々の生きる知恵から論理を立てようというのが生活環境主義ですね。その人たちの持っているルールは政府のルールとは異なっているし、地方自治体の条例とも異なっている。そこに住んでいる人のルールがすべて正しいとは必ずしも言えないんですけど、そこから発想し、考え方を立てていこうとした。立ててみたら、意外とそのほうが環境が保全できていたんですよ。

最近、生物多様性を謳う日本のNGOが、私があるところで話した民俗学的な村の話を英訳したいと言ってきました。何で英訳したいの？ と聞いたら「自分たちはピオトープなんかをあちこちにつくって絶滅危惧種を救う努力をしてきた。ところがピオトープはほとんど失敗した。外国でも失敗している」というんです。この人たちは真面目にピオトープをつくってきたんですよ。それらが政策的

に失敗して、結局どこが一番うまくやっていたかと考え直すと、この地元の村の人たちの動植物の使い方や暮らしだったわけですよ。

この生活環境主義も30年経つのかな。一緒にやっていた現・滋賀県知事の嘉田由紀子さんがまだ院生を終えたばかりのころですよ。私たちがつくったというより、本当に地元から教わったものですよ。結局地元の人たちが蓄積してきた知恵というのは論理があつて、それがどういう論理、どういう説明の体系になつていくか、それを政策に落としとくときにどういう実効性を持つかということを考えながら出てきた論理です。今日話したことも、結局は生活環境主義的な考え方なんです。

初めのころはものすごい批判を受けました。そんな主観的な話は社会科学ではないという批判を受けたのですが、ある段階から批判がなくなりました。最近、生活環境主義が再び批判を受けています。最近の批判は、もう生活を軸に考えるのは当たり前で新鮮味がないということですよ。

ただ具体的な政策としては、まだそうなっていないですね。だから、このモデルでの環境政策は必要だと、まだ言い続けなければいけないと思つています。

生活環境主義は公共投資にはつながりません。私の案は「予算をつけにくい」と言われたこともあります。

私だったら、樋川のコンクリートや偽木なんかやめて、地元の人や学生たちと一緒に汗をかかす。盛りが上がるし、金が全然かからないじゃないですか。でも、こんな発想は受け入れられない。

行政の陥りやすい失敗の一つは予算化して施設をつくりますが、その予算にメンテナンス料が入っていないことです。

私たちに任せてくれたら、まず地元の自治会の人と話をします。どんなのをつくりよう、アイデアを出しあいましょう、と。つまり、結果的に手伝わざるを得ない形に持つていくのです。その人たちのアイデアを取り入れていっただ道普請と同じなので、地元では村仕事のつらくなりますから必ずやってくれる。そうやって面白く

うしたらうまい水を維持していいのか、という政策に切り替えていけば樋川みたいなものも残つていく。

やっぱりうまい水というのが水との共存のあり方なんじゃないのかな。どうしたらうまい水をつくれるかっていうのは水の魅力で、安全な水なんていってしまうと役所くさい。

名水百選なんかでおいしい水を欲しいと思う人は多いと思うけれど、保全しよう、自分たちがつくり出そう、というまでにはいけません。特に都会に住んでいる人間が自分たちで維持するとか、汚さないようにしようとかは思わない。

うまい水をつくるというのは、山を荒れさせないことだと思つて、ということとは、日本では人間の手の入らざるを得ない。

生活環境主義という考え方からいうと、暮らし自身が希薄といつか今までの知恵を受け継いでいない世代が大人になりつつありますよね。でもその解決策は、昔の家のようにならば世代家族をつくることではないと思つています。コミュニティ内でも異なった世代がコミュニケーションする方法があるのかという方向になつていくと思つて、血縁にかかわらず世代間交流をしていく。

今、村の仕組みを再考する必要があります。

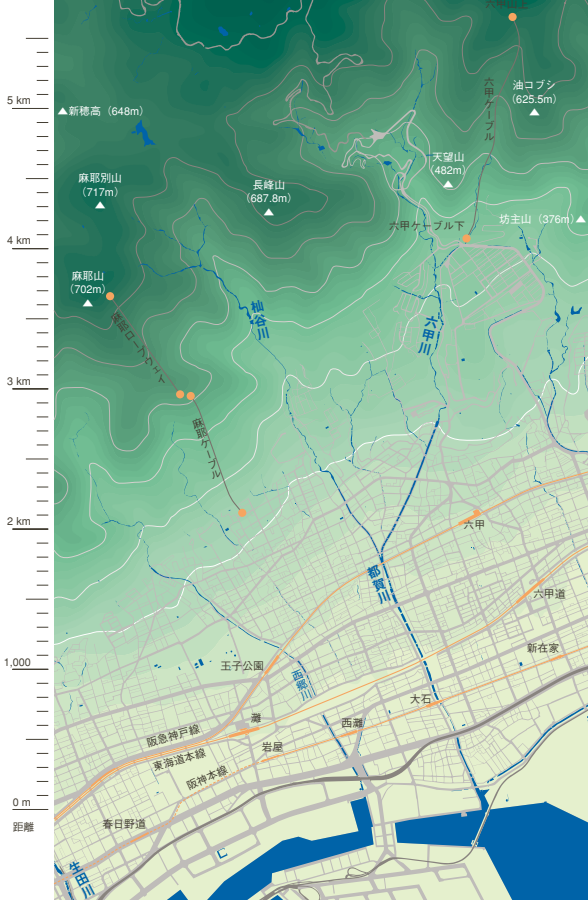
があるとつて、最近感じるのは、みんな水平的なお友達の仲間はずれるんですが、なにかを決めようということになるとすごい嫌がる。ある程度のもままりはできるが、決め事ができない状態です。縦の関係はつくりづらくて、そういうことが共通の問題になつている気がします。だからこそ、世代間交流が求められているんですよ。

### 都市にも水との共生の論理を

これは非常にデリケートな問題ですから、慎重に発言するべきですが、今年神戸の都賀川で水の事故が起きました。その被害者たちは、そのことをどう納得したらいいのか。

例えば行政責任を問うて賠償金が出たとしても、その子供を亡くした悲しさとか悔しさとかは納得できないことだと思つています。だから賠償金の問題と、納得の問題は別だと思つています。それを現代人はついぶん忘れてるよう

に思つています。それは、水への依存度の大きさに原因があるのでしょうか。ただ、都賀川の場合は、地元の人



ちは川に戻ろうということのをきれていた。初めの動機は大会で川が汚れているのは恥ずかしいことだという声を発した男性がいたんです。そこから動き始めて、だんだんと大きな運動となっていた。水がきれいになってからは、子供たちが泳げるようになりました。下が砂だから魚もいるし、そういう所で泳ぐというのはプールに比べて楽しいから、子供たちはすごく喜んだんですよ。

本当に川に近づこうという運動で成功していたんですね。大都会だったけど川に近づいていける先端をきった。他の地域も真似し始めたぐらいだったので。

本来、子供が川にいるのは当たり前なんですけれど、川で事故が起きると「あんな川に子供を」とマスコミに叩かれてしまう。

行政が悪い、自分たちは悪くないという論理は、川はある段階から行政の管理に移っているから仕方がないんです。でも、それだけじゃいざというとき納得できる答えが見つからない。

琵琶湖なんか、平成に至るまで行政がどんどん住民の権利を取り上げていくんです。「水と人の環境史」で取り上げた前川というあんな小さい川さえ、行政が三面コンクリート張りにするとか言い始めるんです。「そしたら川の水

がさつと流れてみなさんは掃除しなくて済みますよ」と。掃除しなくて済みますよ、というのは我々にお任せくださいってことですからね。

その辺りの小さな地域では、こーやって全部行政が管轄していつて、三面コンクリート張りにした後は暗渠にするんですよ。そのことによつて道が広くなるということまで持つていく。それは行政が工事ができることの嬉しさだと思っんですけど。

水と暮らしが近い関係にある地域でさえ、そういう状態ですから大都市では余計難しい。しかし、大都会の人たちも、自分の解釈を持たなければいけないと思うんですよ。現代的な自分たちが納得できて、今後の環境の動きに積極的にかかわれるような論理を。

もしここまで行政が関与してなかったら本来、つくったはずなんです。そのつくる作業を怠らざるを得ないシステムになっているのが問題です。

これは知識伝承がいったん途切れてしまったことの弊害でもあります。雷が鳴ってきたら高い木のそばに寄らない、大雨が降ったら河原から上がるってということが知恵として伝わっていたら、と思います。行政が川を管理しはじめて、今の子供たちの親の年代は上から

の伝承が切れてしまったのは不幸なことです。

アメリカを例に出して褒めるのは好きじゃないんですけど、たまたま家族でアメリカに住んでいたことがあって社会科の授業を見学しました。アメリカでは地元の運河がどうやって拓かれてどうなったか、ということが社会科なんです。

日本の場合、歴史で言えば、私たちは源頼朝がどうなったっていいじゃないですか。地理もどこの鉄鉱石は何番目で、日本で採れる所は夕張で、石炭はどこか、自分たちの地域から遠い知識ばかりです。

自分たちが住んでいる所にこういう運河があって、その運河はどんな人がどうやってつくった、ということをお話として教えることに私は感心しました。知恵が伝承されてきたわけです。

入試用として、日本一律の知識を詰め込むのは、本当に生きる知恵につながりません。本当に生活に根ざした生きた知恵を伝えなければならぬ。そうすることで、はじめて人と水とが共生できるのではないのでしょうか。

